

役場の対人援助論

(2 5)

岡崎 正明

(広島市)

対人援助職、帰宅困難者になる

2018年7月6日

その日は朝から雨だった。

数日前から降ったり止んだり、空気は常に湿っていた。天気予報では「記録的な雨になるおそれ」と恐ろしげな予告も繰り返され、みんなそれなりに構えてはいた。しかしいざ事が起こらないと結局その打開もできないという当たり前の中、私たちは思ってもみなかった事態に混乱し、ショックを受け、右往左往した。

「こんなことになるとは」「まさか」なんてことがない人生はないし、「家族にはいろいろなことが起こる」とは本誌の団編集長の言葉だ。まさにその通り。

分かって聞いていたつもりだった。しかし、本当のところでは分かっていなかったのかもしれない。気がつけば私は「まさか」とバカのひとつ覚えのようにつぶやいていた。たかが40年程度の経験でしか先をイメージできず、渦中の真っ只中にどっぷり浸かってからようやく「これってもしかしてヤバい？」となった。私がアリなら、アリジゴクと目が合う頃になってようやく事の重大さに気づく、そんな間抜けな个体だろう。

だがおそらく、多くの人が私と似たり寄ったりだったように思う。なぜならあの日、私は自分と同じような様子の人にたくさん出会った。みんな私と同様途方に暮れていた。便利になった世の中は、それが機能しなくなった途端、ひどい副作用をもたらすものらしい。

今回の役場の対人援助論では、7月の西日本豪雨災害で私自身が体験し見聞きした、日常がいつの間にか災害場面になる瞬間や、帰宅困難者として感じた思いなどを記録させてもらいたいと思う。

災害場面で対人援助職に何ができるのか、どんなことをイメージしておけばよいのか。その手掛かりの一助となるような記録になることを願って。

いつもの帰り道

職場を出た時はまだ日常だった。17:45に妻へ「今から帰る」とメール。天気予報をチェックして、日曜に約束した友人家族との釣りには行けるかな？なんて、のんきに考えていた。

いつもなら都市高速を使って30分程度の帰り道。雨の週末ということもあって、多少の渋滞は覚悟していたが、それにしても前が進まない。高速も大行列。待つのが嫌いな私は、普段は使わない迂回路へ進んだ。海にかかる橋の上は、雨で川のようになりつつあった。水しぶきを大量にあげながら、私の車も対向車も進んでいた。広島と呉を結ぶ国道31号線へ出たが、そこも大渋滞だった。

坂駅前では車はほとんど動かなくなった。職場を出て1時間。雨は相変わらず強く、ニュースでは「九州北部に特別警報が出ました」と伝えていた。

この時点でも私にはあまり危機感がなかった。ただ、早く高い所に行こうとは思った。この辺りはもともと埋め立てだ。大きな川は記憶に無いが、それでも万が一の浸水が怖いと思った。1番安全と思える有料道路を通り、自宅へ帰ろうと考えていた。

さらに1時間ほどかけてようやく自宅につながる矢野の住宅街まで来た。この頃から消防や警察の緊急車両がひっきりなしに通りはじめた。高台の坂道には、どこから流れてきたのか土砂や折れた枝が転がり始め、それは上に進むほど増えていく。私はようやく「これはちょっと今までと違うぞ…」と感じ始めた。

迷いながらも空腹とトイレのことが頭をよぎり、行列を抜けて目の前に現れたコンビニへ。駐車場はいつもの倍以上の車でひしめきあっていたが、運よく空いたスペースが見つけれられた。中に入るとすでにおにぎりは売り切れだったが麺類は残っていた。トイレを済ませ、パスタとお茶などを買って車でテレビを見ながら食べた。隣に停めた車の夫婦もずっと車内におり、私と似たような状況に思われた。長時間駐車して店員から注意されないか心配もしたが、同じような車だらけのためか、声をかけられることはなかった。

家族にメールすると、自宅のある町への道はすべて通行止めになったとのこと。また町内では住宅を巻き込む土砂崩れも起きていていると。テレビではついさっき車で走っていた坂駅前が冠水した様子が映し出され、私はここに至ってようやく、今がただ事では無いことを理解した。

職場に戻ることも考えたが、市内に戻る道もまったく動かない。そもそもどの道が安全かも分からない。私はここで車中泊することにした。というか、それ以外の選択肢が見当たらなかった。

しかし振り返ってみると、この時点では正直、まだ本当の意味での深刻さというか、困り感は低かった。もちろん怖いとも感じていたが、不謹慎を覚悟で告白すれば、それと同時に変な高揚感があった。久々に車中泊することや、テレビに見知った場所が繰り返し映し出される非日常に興奮していたように思う。「よし、やったるぞ！」みたいな気概に満ちていた。

あとから考えれば、あれは体が危険を察知してアドレナリンが出ていたのだろう。その反動のため、翌日からどっと疲れが出た。気分も落ち込んで、しばらく立ち直るのに苦労した。

22時を過ぎ、私はシートを倒して横になった。今起きていてもどうしようないし何もできない。気持ちは落ち着かないが、ここは早めに休んで明日早朝から動けるようにしよう。

そう考えた。

蒸し暑いのでエアコンをつけたいが、エンジンをつけっぱなしにするのは残りのガソリンや、店側への迷惑も考えるとためらわれた。1～2時間浅い眠りをしながら、時々エンジンをつけエアコンを入れてニュースをチェックする。外は尋常ではないほどの大雨と、何度も通る緊急車両のサイレン音。車内では携帯からエリアメールが繰り返し鳴る。当然熟睡などできるはずもなく、朝5時にはこれ以上休むことを諦めた。3時間は眠れたかな、くらいの体調だった。

朝がきて

ニュースと家族からのメールを見ながら、今後のことを考えた。ようやく雨は止んできたが、町への道が復旧する見通しは当面立ちそうもないという。

「何はともあれ水分を確保しないと」

「携帯の充電があと半分もないな」

「食料は最悪お菓子でもなんでも口に放り込もう」

「ガソリンもまだ半分以上あるが…大事に使わないと」

まったく先の見えない状況で、あれこれと対応を考えた。どうする？どう動く？

とりあえず万が一携帯の充電が切れた時のため、妻や両親などの連絡先をメモ書きした。

コンビニ店内に入ると弁当・麺類・パンなどはすでになく、携帯の充電器も売り切れ。水とお茶も完売だが、ジュースやお菓子、インスタントラーメンなどはまだあった。何より身につまされたのがトイレの重要性。店内には男女1つずつトイレがあったが、昨晚からすでに行列ができるようになり、早朝からは常に並んで10～15分待たなくてはいけない。考えてみれば当然だ。トイレというものは老若男女誰もが平等に、数時間経つと必要になる代物なのだ。案の定コンビニに駐車している車だけでなく、周囲の道路で立ち往生している車から次々と利用者がやってきていた。

トイレの列に並んでいると、車内のような一定のプライベートが確保できる空間と違い他人との距離が近い。いろいろな物が目に入り、考えることも増える。数百メートル先の車から歩いてきたらしい高齢者。イライラした様子の男性。土地勘がなくて不安がっているグループ。知り合いの子どもにも順番を譲る女性。行列の目の前にあるアダルト雑誌の表紙をポカンと見ている小学生、などなど。行列全体にジリジリした焦燥感みたいな空気が漂っている。「早くしてくれよ」頭の中で思わずつぶやく。

その時だった。突然底知れぬ不安感に襲われた。「こういうのってTVで見た避難所の映像によくあるやつじゃ？」「これから私どうなるんだ？」。深刻な恐怖感が急に迫ってきた。

トイレを終えてしばらくすると、交差点に警察官がいて数人が何か尋ねていた。私も出て行って他に帰れる道を聞いたが、「どこもダメ。このあたりよりひどい」とのこと。その場に集まった人々と、なんとなく会話になる。もちろんみんな知らない人だが、寄る辺なさを抱える者同士の連帯感か、自然に互いを気遣い、協力し合おうとする雰囲気生まれる。

「自分広島に来てまだ半年で、この辺の道に詳しくなくて…」「そりゃ不安ですねえ」

「〇〇方面はこんな感じみたいです（スマホの画像を見せてくれる）」「こりゃひどいね」

「エコノミー症候群気をつけてくださいね。自分マッサージ師なんで、どっか痛いところとかあったら言ってください」「食糧なら持ってるから。お腹すいたら言って。孫に持ってい

くはずだったんだけど」

こんなやりとりが飛び交う。それだけで少し元気が出る。本当に助けを借りなくとも、「いざとなったらこんな風に言ってくれる人がいる」「困っているのは自分だけじゃない」と思うだけで、人は結構勇気づけられるものだ。

上手に助けをもらおう

帰宅困難者同士の会話で少し持ち直した私は、「とりあえず今自分にできることをしよう」と腹をくくった。分からない先のことでモヤモヤしていてもしょうがないと割り切れた。

携帯の充電を優先事項の1番と決め、私は周辺の家を訪ね歩き、充電させてもらえないか聞くことにした。いまだに某元国営企業系のガラケーのため、すぐには見つからない予想はしていたが、何軒か回れば充電させてくれる家もあるだろうと考えたのだ。

この時普段「対人援助」に関わるものとしての経験が、少しは役立ったように思う。見ず知らずの人に助けを求めるといふ、なかなかハードルの高い作業。大事なのは、相手が気持ちよくこちらを「助けよう」と思えるか否かだ。そのためにどういう伝え方が効果的か。その辺はある程度理解しているつもりだった。

まず知らない中年男が訪ねることになるため、不審者と思われぬように「お忙しいところ突然すみません。ちょっとよろしいですか？」とワンダウンポジションで丁寧に入る。次に「自分は今あそこで立ち往生しているたくさんの車の中の1人なのですが…」と出自をあきらかにし、ついで「自宅に帰る道が通れずに困っています。家族と連絡をとるために携帯が欠かせないのですが、その充電がなくなってきました」と理由を述べたうえで、「厚かましいお願いなのですが、可能であれば携帯の充電をさせてもらえませんか」と、明確に『何を』助けてほしいのかというオーダーを伝える。初対面に臆しないメンタルも必要だが、これも仕事で鍛えられていたように思う。

結局7～8軒のお家を訪ねたが、どの家でも大変親切にしてもらえた。やはり人間、弱っている者を鞭打つようなことはできないもので、逆に「お水はありますか?」「大変ですねえ。お腹すいてませんか?」などと聞いてくれた方もあり、その言葉だけでもとても助けられた思いがした。ちなみに充電の方はどこのお宅にも適合する機種 of 充電コードがなく、「そろそろ本気でスマホのことを考えねば…」と痛感するオチがついた。

トボトボと歩いて車に戻りながら、私は「この先どうしよう。どうすればいいのだろう」と考えていた。いつまでもここにいるわけにはいかない。いずれ食べ物も飲み物も無くなってくる。ガソリンも携帯の充電も減っていく。そうになると、近くに開設された避難所に行ったほうがよいのか? そうすればトイレや食事の心配は回避されるかもしれない。しかしそれはどこにある? 車で行って駐車場はある? 仮に行けたとしても、じゃあいつまでそこにいる? いつ自宅に帰れ、家族に会える? 着替えはどうする? そもそもこの町の住民じゃないけど、避難所は入れてくれるのか?

様々な心配と不安が浮かんで消え、考えるだけで気持ちが消耗していく。

そんな時家族から「町につながる道が1つだけ通行可能になったようだ」との連絡が入った。まだどこのニュースにもなっていない、町内放送だけで知ることができた情報だった。

災害が起きて思うこと

以上がたかだか 20 時間に満たない、私の帰宅困難体験である。このあと普段なら車で 15 分の道を、3 時間かけて自宅に帰り着き、無事家族に会うことができた。しかし同じコンビニにいた帰宅困難者の中には、まだその先の道が通じていないために帰れない人もいたし、職場に戻ってそこでもう 1 日過ごしたという人もいた。

熊野町、坂町小屋浦、呉市天応、安芸区矢野東など、今回の災害で何度も全国ニュースに登場した地名は、私にとって普段の生活圏だった。珍しくもない日常の景色だった。通勤路も、遊びに行った山も、友人が住む団地もそこにあった。

幸い私の自宅も親族の誰も被害はなかったが、友人の中には妊娠中の妻が実家で浸水被害に遭い、翌日の夜にようやく救出されたという人もあった。別の知人からは避難所暮らしの苦勞も聞いた。母の友人、職場の同僚の実家、同じ保育園の保護者の自宅など、すぐ身近に被害の話聞いた。

「あの人と私を分けた違いはなんなのだろう」と答えのない問いが頭を巡り、被害がない自分が何だか申し訳なくすら思えてくる。東日本震災や戦争を生き残った方達の語りに、同じようなものがあったと聞いたことがある。私程度の体験でこれくらいだから、あの人たちはもっと大変だったのだろうと、乏しい想像力を働かせている。

災害から 1 カ月以上過ぎたが、相変わらず道路は復旧していない所も多く、至る所で普段なら起きない渋滞が発生し、正直うんざりする日々だ。ほかにも様々な生活上の影響があり、困ることも多い。しかし直接被害を受けた人のことを考え、とにかく今自分にできることをしようと立ち戻る、そんなことの繰り返しだ。

「まさかここで災害が起こるとは」。誰もがそう口にした。だが今回被害が出た場所は、明治頃には水害があった地域や、そのすぐご近所だった（そんなことも地元の人間なのに知らなかった）。人間の忘れっぽさを改めて理解しておく必要がある。地球規模で考えれば、200 年に 1 度の大雨なんて、よくあることなのだ。

私たちはどこにコンビニがあるとか、どこのスーパーが安いとか、「街」のことはよく知っているつもりである。しかしあきらめるくらい自分の住む場所の「地理」を知らない。そのことを思い知らされた。近くを流れる川や、橋の名前を知らない人もざらだ。最低限生きていくための常識として、どんな地形の上で生活しているのかは、知っておくべき情報だろう。

これももう研究されていることだろうが、人はショッキングな出来事を経験した時、それをすぐにきちんと受け止めることは中々に難しい。現実感が伴わなかったり、過小評価して平気なふりをしたり、大きく動揺して思考停止したり。個人差によってもいろいろだが、向き合って消化するには時間がかかるものだ。そのことは知っておいて損はない。自らがそうなった時、自分を待ってやることができるようになるのだから。

体験や気持ちを話すことも大切だと感じた。信頼できる相手や似たような経験をした人に語る行為は、気持ちを整理することにつながる。このあたりでも対人援助職の活躍できる場面はあるように思う。

復興はまだまだこれからだが、少しずつ進んでいる。自分にできることの小ささに時に絶望的にもなるし、悲しい話もたくさん聞いたが、逆に助け合い、支え合おうとするイイ話もたくさん耳にした。私も自分のできることを、怠けず、無理せず、一歩ずつやっっていこうと思っている。